

音楽教育学からの展望

教育学部福山分校 幣原映智

1. 音楽教育学からの大学外へのサービス

音楽は、言うまでもなく個別芸術の種として、^{あまね}普く万人の受容のために開かれている。また音楽教育学は、たとえば音楽的な感受性を高めることについての原理、過程、方法等の助言を行い、鑑賞教材についての情報を提供し、演奏技術の規範を呈示することによって、受容能力を伸ばす手助けをする。このように音楽も音楽教育学も、本性的に「開かれて」いるので、機会あるごとに、私どもは学問や技法の研究の成果を大学外へ向かって提供すべきであると考えている。それは文化に対する私どもの義務だからである。

実践活動の具体例を挙げよう。まず、学校の音楽担当教諭に対する啓発や情報提供は、教育学部主催の高校教育講座や、附属校主催の研究会等で行われている。また、これは毎年開かれるわけではないが、一般市民への公開講座も他科の教官や学外講師の協力を仰いで行われており、昨年の例では「人間と音楽—豊かな心をもとめて—」というテーマの下に10回の講演を行った。更に、一般市民の音楽活動に対する指導・助言・協力は、声楽、器楽、作・編曲の領域で、あるいは審査の形で、積極的に行われている。

音楽教育学講座の課程においては実技に多くの比重がかけられている。当然、実技の研究・教育の成果を世に問うための、教官と学生による研究発表（演奏会）も年間の行事として行われている。この数年間での最も意欲的な演奏会を挙げるとすれば、それは昭和59年度のオペラ「ベンゼルトとグレーテル」（E.フンパーディンク作曲）の公演であろう。歌唱や演技やオーケストラ伴奏はもとより、演

出、舞台装飾、照明等についても、望みうる最高の専門家の指導と協力の下に、このオペラの質の高い上演を福山市民に提供できたことは音楽科の記念すべき喜ばしい出来事であった。



オペラは歌唱や楽器演奏の音楽的要素と、演技や舞踊の要素と、装飾、衣装、照明等の舞台美術的要素が、劇的演出の下に総合されるため、経費の問題も含めて、制作には大きな困難を伴うが、それなりに社会に与える文化的インパクトは大きいので、諸々の困難を克服できれば、今後も数年に一度はオペラの発表を実現したいと念願している。またその演目も、専門の歌劇団公演と競合するのではなく、多くの世代を啓発し情操を高めるような古典オペラを発掘して、音楽教育学、音楽学、技法内容学の担当教官全員の関わる共同研究作業の集大成の形で制作できればなおさら望ましいことであろう。

2. 社会的要求の変化への対応

これまで長年にわたって、音楽教育学（講座）は中・高校の音楽科の教員を養成し、全国の学校へ多数の優れた人材を送って来た。

ところがこの2、3年の間に教員採用が急速に減少した。これは決して卒業生の成績が悪かったのではなく、中・高校の就学人口の減少という構造変化によるものである。こうして音楽教育学においても多目的教育が現実の課題となった。

「多目的」「個性化」とは言っても、こうした理念に沿う教育方針や体制が整備されたわけではない。しかしそれについては進みつつ模索することにして、とりあえずこの理念に適應できるように、入試の選抜方法を改め、昭和63年度から推薦入学を導入して演奏技能の高い者を若干名選抜することにした。また一般入試は分離分割方式とし、前期は従来どおりの基準で選抜し、後期は共通一次に一層比重を置くことにした。まだ変革の端緒ではあるが、やがて取るべき柔軟な体制のための可能性を整えているところである。

3. 大学における音楽の実技

社会的要求が変化するにつれ、音楽教育学における多目的教育がどのように具体化されるにしても、音楽の実技の研究・教育は、音楽教育学の一領域として重視されねばならぬであろう。たとえば生涯教育に関連して、職場や地域の音楽活動を考えれば、今後、アマチュアの技能や専門知識の水準はますます高くなるであろうし、それに相応する能力を備えた指導者や協力者が求められるようになると予想されるからである。また多目的教育の中には、依然として教員養成は必要であり、採用は減少したものの、なおさら、少数精鋭の能力の高い教員を送り出さねばならないだろう。

確かに、大学の学問として、殊に人文学科として、音楽実技を置くことには疑念を持つ向きもあるかもしれない。古代における音楽に関する研究は数学の一分科であったし、中世・ルネサンスの大学で講じられた「ムシカ」も同様である。おおむねヨーロッパの大学では、伝統的に音楽研究から実技が除かれている。しかし、ホッホシューレのような別的高等教育機関で、音楽教育学の諸科学と実

技との非常に質の高い研究・教育がなされており、アメリカの大学でも同じように行われている。

既に、大衆社会や都市化に関連して、個の喪失や人間疎外が指摘されて久しい。今後、工学的技術はますます深く日常生活に浸透するであろう。それとともに逆に、手の技の人間的な意義が見直されることになるだろう。音楽の実技も手の技の一つとして、単に音楽教育学の分科領域としてばかりでなく、人間性の観点から、大学で研究されるべきではないだろうか。

4. 「自己中心」時代と音楽教育

最近の某新聞の調査によれば、人々は今日の世相を「自分本位」で「無責任」と感じているということである。新聞やテレビの報道に目をやると、それを裏づけるかのように、実におぞましい事件が続発している。事象を社会的風潮や世相と関連づけて理解するためには、個々のケースについての十分な調査や、専門的な考察が必要であろう。それはしかし専門家にお任せして、叱責を承知の上で、以下にさして根拠のない、音楽研究に携わる者の直観的社会論評を連ねる。

音楽教育の人格形成論を道具にして、先の事件や世相を「音楽教育の軽視」に由来するものとして因果的に説明したり、あるいは「共通の根」を指摘する、という論法がまず考えられる。つまり人間形成は情操を含む心意の育成によってなされるはずであるのに、たとえば知的な教科の偏重や、あるいは他の要因による学校音楽の軽視（の風潮）が人格の陶冶を妨げ、そこから自己中心主義、他人への無関心、果ては反社会的な行動が出来る。この論は今日では余り顧みられないが、音楽教育の根拠を説く古典的な論説である。

5. 手の技による人間回復

次に現代の風潮の由来を、日常生活における手仕事の省略と関連づけて考えてみる。今日、我々の生活の中に、複写機、パソコン、ワープロその他の便利な機械が導入されている。それらはおおむね、かつて各人が手仕事



で行っていた筆写、統計計算、分類、辞書参照、文例参照、作文、編集等に要した労力のかなりの部分を機械が代替する。各人は機械に対して、命令のための単純な操作を正確に施すだけでよい。これ自体は便利な結構なことであり、我々にとって有難いことである。

問題は、経験や習練を通じて獲得されるべき知識・技能が脱落し、その代わりに、プロセスを考慮せず結果のみを重んじる操作精神が残ったことである。そしてこのような事態が、パソコン・ゲームや、自動演奏・伴奏装置等、「遊び」や「制作」の領域にまで進んで来たことも憂慮される。

経験や習練を積むことは、知識・技能を獲得するばかりでなく、それを通じて、向上の努力、忍耐等をも培う。また他人の知識・技能への注意力を喚起し、他者への思いやりや尊敬の念を抱かせる。今日の世相は、これとは逆の精神に根ざすもので、それは現代の様々な行動—奇異な自動車運転、並外れた大音量の音響への陶酔等—にも現れている。人間らしい心を取り戻すためには、道徳教育もさることながら、僅かに残された手の技=実技を大切にせねばならない。またこれによって大学は一層開かれた学問の地歩を得るであろう。

